小説社長秘書

傑作情報小説

豊田行二

KOBUNSHA BUNKO
光文社文庫

光文社文庫

傑作情報小説

小説 社長秘書

著 者 豊田行二

1991年10月20日 初版1刷発行

発行者 大坪昌夫
印 刷 大日本印刷
製 本 大日本製本

発行所 株式会社 光文社
〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13
電話 東京 03 (3942) 2241(代表)
振替 東京 6-115347

© Kōji Toyoda 1991

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-71408-0 Printed in Japan

光文社文庫

傑作情報小説

小説 社長秘書

豊田行二

光 文 社

目次

第一話　社長室の犯罪　5
第二話　乗っ取り王　90
第三話　横領伝説　149
第四話　陰の秘書室　191
第五話　砂上の楼閣　236
第六話　死美人の正札　283
解説　青木直也（あおきなおや）　332

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一話　社長室の犯罪

1

五月の空は明るかったが、パリの街は灰色をしていた。
東京よりは気温は低い。
日本の女性に人気のある革製品の専門店『ルイ・ヴィトン』は凱旋門のあるシャルル・ド・ゴール広場から星形に伸びる通りを、凱旋門に向かって左手前を斜めに入ったところにある。
派手な看板が出ているわけではなく、よほど注意をしないと気づかずに通り過ぎてしまう無愛想な店だ。
川瀬道夫は、地図を頼りに『ルイ・ヴィトン』を探し当てると、調査役の星島を振り返り、入り口のドアを押した。
星島則昭は四十二歳。三十歳の川瀬よりはひとまわり上だったが、フランス語はさっぱりだめだった。したがって、パリ滞在中は仏文科出身の川瀬がひっぱりまわす格好になっている。

その川瀬にしても、パリは初めてだった。

星島は、パリは三度目だが、過去二回はガイドについてバスで市内見物をしただけだから、道案内などできるはずはなかった。

『ルイ・ヴィトン』の店のドアを開けると、小柄な男がひとり、ドアの内側に所在なげに立っていた。ガードマンらしい。

中に入ると、その奥にもうひとつ入り口があり、その内側が売り場になっていた。

売り場の入り口には、アメリカ人らしい中年の女性と、パリジェンヌがつっ立って、売り場を眺めている。

川瀬は、そのそばを通って売り場に入ろうとして、五十年配のやせた背の高い女の店員に押し戻された。

「順番を守ってください。ほかのお客さまは並んでお待ちになっているのですよ。この店では、店員が順番にお客さまをご案内することになっていますから」

女の店員は、とがめるような口調でいい、売り場をのぞいているふたりの女性のほうに顎をしゃくった。

ふたりの女性は、売り場の様子をうかがっているのではなく、案内の順番を待っていたのだ。

「どうしたんだ」

フランス語のわからない星島は、不安そうに尋ねた。

「順番なんだそうです」
川瀬は若いフランス娘のうしろについた。
「生意気だな。売り場はがらがらだから、入れてくれてもいいじゃないか。買うほうが王さまだということをフランス女は知らないのか」
星島は舌打ちをした。
星島のいうように、売り場には客の影はまばらにしかない。店員の態度はいかにも尊大なように見える。
「おれにフランス語ができたらな」
星島は悔しがった。
やがて、ひとりの客が、紙包みを抱えて、店から出ていった。
それまでその客についていた女店員が、初めて、先頭のアメリカ人の婦人を売り場に入れた。
一組みの客に一人の女店員がつくのだ。
「何をお求めになるつもりですか」
川瀬たちの番がくると、係になった女店員が尋ねた。
「ハンドバッグと、それから……」
川瀬は店の中を見まわした。
「ハンドバッグならこちらです」

女店員は、売り場の左手に、川瀬と星島を案内した。そこがハンドバッグの売り場だった。ショーケースの代わりに低いカウンターがあり、うしろの棚に商品のハンドバッグが並んでいた。

売り場は商品ごとに壁に沿って設けられており、フロアの中央には商品を展示した台があるだけで、天井の高い店はがらんとした感じがする。

買う商品が決まると、正面右端のレジで代金を払い、右手の壁際にいる女店員にパスポートを渡して、免税手続きをしてもらう。それが終わると、商品を梱包した女店員が名前を呼ぶのを待って、いちばん右端のカウンターで品物を受け取るのだ。

川瀬が棚のハンドバッグを出させている間に、星島はほかの商品の売り場へ行って女店員に注意された。

「お買い物は各商品ごとに承りますから、ほかのものはハンドバッグが済んでからにお願いします」

そういわれたのだ。

きょとんとしている星島に、川瀬は店員のフランス語を通訳した。

「自由の国フランスというけど、これじゃ役所で買い物をしているようで、まるで自由なんかないじゃないか」

星島はてれ隠しに毒づいた。

「郷に入らば郷に従え、といいますから」
川瀬は、星島をなだめておいてから、フランス人のいかにも生意気そうな中年の女店員にいった。
「その棚にあるハンドバッグを全部もらうよ」
「全部、お買いになるのですか」
女店員は、毒気を抜かれたような顔で、川瀬を見つめた。
棚には、大小とりまぜて、ハンドバッグが三十個ほど並べてあった。一個五万円としても百五十万円の買い物である。
「奥さまのお土産なら、多すぎるのではありませんか。それとも、ハレムをお持ちなのかしら」
しばらくたってから、女店員は皮肉な口調でいった。
「そのとおりだよ。わたしはハレムの持ち主なんだ」
川瀬は、にやりと笑うと、女店員の冷たい視線をはね返した。
「ハンドバッグの注文はそれだけだが、次に、紳士物の財布や、皮のブック・カバーなどの小物が欲しい」
「お支払いはトラベラーズ・チェックですか」
「現金で払う。それも正真正銘のフランス・フランでね」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

川瀬は胸を張った。

「まず、ハンドバッグの伝票を切りますわ」

女店員は、ため息をつくと、書類にボールペンを走らせはじめた。その態度は、いかにも投げやりだった。

心をこめて職人が作った商品を、誇りを持って売っているのに、品物の価値すらわからない成金が札束にものをいわせて買っていくのが情けない……。

そう言いたそうな態度だった。

2

川瀬道夫は、国際通信株式会社の社長室の秘書課の勤務を命じられてから、まだ日が浅かった。星島は、同じ社長室の審議室の調査役である。星島も、社長室に来てから、一年とたっていない。

その川瀬と星島に、ヨーロッパの電信電話の視察の命令が出されたのは、一カ月ほど前のことだった。

オランダのアムステルダムでの国際会議に出席する社長の坂野に随行し、国際会議が済んだあとは、社長と別れて、パリとロンドンを視察してこい、という海外出張命令だった。

命令を出したのは、社長室長で坂野社長の右腕という評判の高い砂藤陽介だった。

新宿の高層ビル群の中のひとつの本社ビルの三十階にある、見晴らしのよい社長室長室に、川瀬と星島を呼んで出張命令を伝えたあとで、砂藤室長はつけ加えた。

「坂野社長はきみたちよりひと足先に帰国される。ところが、坂野社長は、きみたちも知っているように、財界や外国のＶＩＰとつきあいの広い方だ。海外旅行をされると、当然、関係先へのお土産が必要になる。そのお土産をきみたちに買って帰ってもらいたいのだ。つまり、視察を行なうと同時に、社長の随行員として、お土産の運搬役もやってほしいのだ」

砂藤は、眼鏡の奥からいかにも切れものらしい目を光らせながら、ふたりを見た。やせ型だが、東大法卒の元郵政省の官僚だけに、人を見る目は鋭い。

「お安いご用です」

海外出張は初めての川瀬は、大きくうなずいた。

「どんなものを買ってくればよいのですか」

星島が、念のために、というふうに尋ねた。

「まず、パリでルイ・ヴィトンのハンドバッグと小物を二百万円分」

砂藤はにやりと笑った。

川瀬は驚いて砂藤を見た。金額を聞き違えたのではないか、と思ったからだ。

「あのう……、二百万円のハンドバッグを買うのですね」

おずおずと尋ねる。

「一個二百万円のハンドバッグではない。一個五万円程度のハンドバッグを三十個ほどと、五十万円分の小物だ」
「まるで輸入ですね」
「そう思ってもらってもいい」
「ほかにもあるのですか」
「エルメスとセリーヌとクリスチャン・ディオールのハンドバッグとネックレスなどの装飾品を、とりまぜて三百万円分。有名ブランドの香水を百万円分。カルチェの金張りライターを百万円分。それから、ロンドンでは、ダンヒルのライターや紳士用財布などの小物を二百万円分。カシミヤの背広の生地を百万円分。それだけ買ってきてほしい」
砂藤は昼食の出前でも頼むような調子でいい、買い物のリストを机の引き出しから出して、川瀬に手渡した。
「合計で一千万円の買い物ですか」
川瀬は、当惑したように、砂藤とリストを見くらべた。
「これから海外出張をする者には、全員に一千万円程度の買い物を頼むつもりだ。もちろん、社長室の者だけに限るけど。これは社長のご意向でもある」
「しかし、一千万円もの買い物となると、成田空港の税関が」
「もちろん、全部、無申告で持ち込むのは無理だろう。かさばって目立つハンドバッグは、き

ちんと申告して、税金を払って持ち込んだほうがいいだろう。しかし、ライターやネックレスなどの小さなものは、バカ正直に申告することはない。成田空港にはうちの支店もあることだし、税関には通関の便宜をはかってもらうように話しておく」

砂藤は、そういうと、机の上の木箱から葉巻を出して、金張りのカルチェで火をつけた。

葉巻を持った左手の手首にはダイヤをちりばめたピアジェが光っていた。

カフス・ボタンとネクタイ・ピンはニューヨークのティファニーの純金製品。ベルトはグッチ、背広はロンドンのオースチンリードのオーダーメイドと、砂藤の身につけているものは世界の一流品ばかりだった。

もちろん、砂藤の給料では、そういった高級品をそろえることは不可能だ。

砂藤がどこかで甘い汁を吸っているのは確かだった。

「一千万円のお土産代を、砂藤室長はどこからひねり出したのでしょうね」

出張命令が出た夜、川瀬は、星島と、会社の近くのビルの地階にある小料理屋で、軽く一杯やった。年も課も違う星島とは、これまで親しく口をきいたこともなかったが、いっしょに社長のお供をするとなると、意思の疎通をはかっておく必要があった。

酒をくみ交わしながら、お土産を話題にする。

「どこからひねり出したにせよ、うちの役員や経理はまったく口出しを許されないからね。社長室は社長直属で、ほかの役員やほかの部下の干渉は一切受けないことになっている。中には、

社長室のことを、国際通信のＣＩＡだといっている者もいるほどだ。うちの会社はもうけすぎているからね、派手に交際費を使わないと、利益を計上しすぎて、世間の集中攻撃を浴びかねないからね」

星島は、早いピッチで杯をあけながら、そういった。

「もっとも、いまだに一ドル＝三百六十円の旧レートで国際通話料金をはじき出しているのだから、もうけすぎは当然といえば当然ですね」

川瀬は相槌をうつ。

円が変動相場制をとってから、一時、換算レートは一ドル＝百八十円台になったこともある。一ドル＝三百六十円の時代と比較すると、円は二倍も高くなったのだ。しかし、そうなっても、国際通信株式会社は円高にはほおかむりをして、利用者には一ドル＝三百六十円のレートで換算した料金を押しつけていた。

一ドル＝二百円台になった今でも、料金は一ドル＝三百六十円の計算である。

これでもうからなければ不思議というほかはない。

もっとも、変動相場制に合わせて、毎日、換算レートを変えていたのでは仕事にならないから、ある程度は固定レートをとらざるをえない、という事情もある。

それでも、一ドル＝三百六十円換算はひどすぎるというので、料金引き下げの声も、これまで何度か出たことがある。

ところが、値下げが国会で審議されそうな雲行きになると、いつの間にかうやむやになり、立ち消えになってしまうのだ。

政界に値下げの動きを阻むための工作資金がかなり流れ込んでいるのは、だれが見ても明白だった。

社長の坂野は政界に通じるパイプを何本も持っているというわさだった。

国際通信株式会社は株式市場に上場している営利会社だが、その性質上、料金などは郵政省の指示を受けて決めている。

社長の坂野誠（まこと）も、もともと郵政省の官僚である。東大法卒だが、主流を外れたために、四十代で国際通信株式会社の取締役総務部長に横すべりしたのだ。それから、常務、専務、副社長を経て、社長のポストに座った。

東大時代の同期生に政治家になった者もいたし、郵政省、国際通信と歩いてきた中で知り合った政治家も何人かいる。

坂野社長は政界に強いというのが、坂野を知る者の一致した見方だった。

社長室長の砂藤も、坂野と同じ東大法卒で、郵政省の出身だった。砂藤は、早々と郵政省での将来に見切りをつけ、四十二歳の若さで国際通信に天下った。そして、四年前の四十九年に社長室長になったが、当時の社長室は副社長の直属で、坂野が副社長だった。

二年前に、坂野が社長になると、社長室は社長の直属になった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com